第二十六章　形容詞ではなく数値で

「数字有りきではなく」
「期限有りきではなく」

このように言って具体的な数値を示さない総理大臣が意外なことにワクチンの接種回数については「一日百万回」とぶち上げた。驚いた官僚は珍しく本気で緊張感とスピード感を持ってこの目標を実現しようとした。なぜか。

総理に忖度しなければ昇進出世は難しい。逆に成果を上げればビッグチャンスが訪れる。場合によっては年功序列を打破できるかも知れない。これまでだったら抽象的な目標に躊躇せずに緊張感を持って対応することはできなかった。まるでゆらゆら揺れる大きなアドバルーンをどのようにして動かすのかというような感じだった。それが具体的に数値で示された。

景気を何とかしろとか、放射能汚染を何とかしろと言うのではない。一日百万回ワクチン接種するという明快な目標が立てられた。仮にうまくいかなくても数値をごまかすことにかけては世界一のプロ集団である官僚組織を総動員すればいい。統計改ざんや資料隠蔽などお手の物だ。

大家も田中も山本の解説を疑うどころかそのとおりだと声を合わせる。

「なるほど」

＊

さて前総理は一日百万回ワクチン接種をすると言ったが平均すると九十万回ぐらいだった。百五十万回近く接種できた日にはワクチン担当大臣がすぐ記者会見を開いて誇らしげに胸を張ったが、六十万回程度の日は何も報告しなかった。非常にわかりやすい対応だった。ところが現総理も三回目の接種について遅まきながら「一日百万回」と前総理のコピー宣言をしたがうまくいかない。

原因は明らかだ。もちろんワクチンの確保問題はあるが前総理は計算高かった。それは少し間隔を開けて同一人物が二回接種を受けるという接種ルールを活用したからだ。ワクチン接種を希望する人は一回だけ接種して二回目は接種しないという人は副反応がきつい人を除いてほとんどいなかった。ほとんどの人が二週間後に二回目の接種を受けた。

「前総理を批判して総理になった以上半分の五十万回とは言えないなあ」

田中に大家が大きく頷く。

三回目のワクチン接種を受けた人が二週間後に四回目を接種することはない。それが証拠に前総理の「一日百万回」宣言後当初は一日数十万人程度から徐々に増えた。つまり二回目の接種時期を迎えた人が接種会場に殺到したのだ。

「今回は一日五十万人を目標に年少者の接種回数を上乗せした百万回を目標に」

同じ百万回でないとインパクトがないと思ったのか、根拠のない数字を掲げたのがまずかった。なぜそういう数字を掲げたのかという説明はない。これが初めての発表ならまだしも前総理の二番煎じになることを無視したのが稚拙だった。一国の最高責任者としては無能と言わざるを得ない。

数字目標を掲げると結果がはっきりと現れる。だから「数字有りきではなく」とか「期限を定めずに」とか言って逃げる。しかし、国民の不満が爆発しそうになると数値目標は避けれない。

感染者数、死亡者数、重傷者病床使用率などを都道府県別に発表しているが、保健所の職員が何人いるとか、あるいは何人増員するとか、ワクチンの在庫量を日々発表するというようなことはしない。東京タワーや通天閣を信号色に染めたところで危機感や安心感を正確に伝えることはできない。

＊

「なぜなんだろう。余り進歩していないように見える」

「そうじゃなあ。たった二年間で六回も感染拡大を経験したのに情けないのう」

「データです」

田中と大家にテレビの中の山本が答える。

「まず何をデータ化するのかに始まり偏りなく正確に収集する。改ざんは言うまでもなく漏れ

をどう防ぐかを絶えず考えながら数字化されたデータを公表してあらゆる専門家に分析してもらう。そして討議してを記録を残して検証の資料にする。これを繰り返して数字で対策を示す」

「言わんとすることは分かるが具体的には？」

大家が不満そうに山本を見つめる。

「何をデータ化するのか。たとえば豪雨で避難したが被害はそれほどでもなかった。いわゆる空振り。でもそれはそれで本番に備える行動として評価できる。それと同じで新型コロナウイルスの場合最悪を想定して全国民を繰り返し検査して刻々と変わる感染状況を把握する。『不安をあおるだけ』という意見もあるが、敵を知らないほうがもっと不安になる」

山本の口調がいつもと違う。テーマがテーマだけに厳しさを伴っている。

「でも世間では重症化する人が少なくなっているし、病床使用率にも余裕があると……」

テレビから田中に山本の鉄拳が飛ぶ。

「お黙り！」

跳ね飛ばされた山本が青ざめる。

「新規感染者数が増加に転じた。過去最悪を記録する県も続出している。誰も新型コロナウイルス感染を予測できなかった。何とか凌いでいるという程度の対策しか打てていない。人類が勝利した戦いの相手はたったの一つだけ」

「天然痘じゃ」

「そうです」

「喉元過男(のどもとすぎお)くんか。人類は」

山本の危機感を理解し始めた田中が起き上がる。

「ある程度予測できる台風に対しても人類は対応できない。地震は？　津波は？　絶えず想定外と言って逃げている。人災の最たる戦争ですら止めることができない」

第二次世界大戦後国際連合を作って平和を目指しても局地的な武力紛争は絶えることがない。田中が山本を見つめる。

「生命体の本質は子孫繁栄の目的のためなら手段を選ばないの」

「生命体は戦うために存在するなんて……」

田中が涙ぐむと大家が残念そうに続ける。

「悲しいが、それが生命の宿命じゃ」

第二十六章　形容詞ではなく数値で